

大学における作文教育への一提言

阿曾村 陽 子

1. はじめに

各大学の再編および変革に伴い、大学で行われる講義科目にも、さまざまな変化が見られるようになった。そこには、少子化の影響や、大学生の学力低下等、いくつもの要因が考えられる。経済学関連の学部をもつ大学が、数学の基本を教えたり、医学部をはじめとするさまざまな学部で、コミュニケーション能力向上のために日本語で書く能力や話す力など、日本語表現力を養成したりする等、従来の大学の科目設定とは異なり、新たな視点から生まれている科目も多くある。それらは、大学ごとの特色として設定されている場合もあるが、今後、作文関連の科目は、多くの大学で取り上げられることとなるだろうと推測される。なぜなら、作文の方法がわからない大学生が跡を絶たないからである。本来なら、作文指導は初等教育から行われ、培われる技術であろう。作文の書き方、ふさわしい内容や文体等は、日本語力の向上とともに指導されるべきものである。しかし、それが叶わず、作文が書けないというだけではなく、作文を嫌う児童生徒、学生が多いのが現状である。多くの教科、行事等をこなさなければならない初等、中等および高等教育課程で、時間的に作文能力の向上に重きをおけないという実情がある。また、作文教育をできない教師も多くいると聞く。そこには、教師自身が、作文教育を受けないまま国語科の教師になったために、その指導法がわからない上、物理的に時間を割けないことから作文教育に多くの時間をとらずに課程を終えてしまう、という負の連鎖が起きていることも否めない。その結果、作文の書き方すら学ばず、ただ作文に対する

苦手意識だけを持った児童生徒および学生が生まれてしまうのである。

一方で、大学では、レポートや卒業論文、また就職先においても報告書をはじめ、さまざまな文書作成を行わなければならない、その必要性も多くの学生が感じていることは、多数の大学生から聞かれるところである。現在、さまざまなコミュニケーションツールがあり、Eメールやブログ、ツイッター等をするすることで、以前よりも文を書く時間、回数は増えている。そのため、文字を見たり書いたりすることそのものには抵抗感を感じなくなっている学生は多くなっているという。しかし、学校で課されるいわゆる作文に対する意識は依然として低いままである。そのため、昨今の大学では、特に初年次教育として、文章表現能力向上のための講座が設けられるようになり、その数は、次第に増している。しかし、選択科目であれば学生の向上心と相まって、効果が高い講座となりうるのであるが、初年次教育は必修科目であり、学生のモチベーションの有無にかかわらず、それぞれの学生の文章表現能力を向上させなければならない。時間数も限られており、また、必修科目であれば、少人数クラスも望めないだろう。では、どのようにすれば、効率よく学生の文章表現能力が向上し、その内容もまとまったものとなるのであろうか。本稿では、実際に大学生および社会人が書いた作文をもとに、現在の大学生および社会人の作文レベルを知り、大学生の作文能力向上のために必要な要素を挙げ、論証し、今後の大学生への作文教育への一提案をすることとする。さらに、社会人がもつ作文にかんする問題点についても考えたい¹⁾。なお、本稿における作文とは意見文のことをさし、感想文や随筆、小説等の自由な形式で表現可能なものについては扱わないこととする。

2. 現在の作文指導について

高等学校の学習指導要領

大学での作文教育について考える前に、高等学校までで行われるべき作文教育の基準を確認しておくこととする。以下は高等学校の国語科学習指導要領の抜粋である。ただし、途中、本稿と関係ないと思われる部分は省略した。

高等学校学習指導要領 第1節 国語

第1節 国語

第2款 各科目

第1 国語表現Ⅰ

2 内容

次の事項について指導する。

- イ 情報を収集、整理し、正確かつ簡潔に伝える文章にまとめること。
- ウ 目的や場に応じて、言葉遣いや文体など表現を工夫して話したり書いたりすること。
- エ 様々な表現についてその効果を吟味し、自分の表現や推敲に役立てること。

3 内容の取扱い

- (1) 話すこと・聞くこと及び書くことの指導は、相互の関連を図りながら効果的に行うようにし、授業時数は一方に偏らないようにする。
- (2) 内容のウについては、発声の仕方、話す速度、文章の形式なども扱うようにする。
- (5) 指導に当たっては、例えば次のような言語活動を通して行うようにする。
- イ 観察したことや調査したことを記録したり、まとめて報告したりすること。
- ウ 相手や目的に応じて、案内、紹介、連絡などのための話をしたり文章を書いたりすること。

第3 国語総合

1 目標

国語を適切に表現し的確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力を伸ばし心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。

2 内容

B 書くこと

次の事項について指導する。

- ア 相手や目的に応じて題材を選び、効果的な表現を考えて書くこと。
- イ 論理的な構成を工夫して、自分の考えを文章にまとめること。
- ウ 優れた表現に接してその条件を考え、自分の表現に役立てること。

〔言語事項〕

話すこと・聞くこと、書くこと及び読むことの指導を通して、次の事項について指導する。

- ア 目的や場に応じた話し方や言葉遣いなどを身に付けること。
- イ 文や文章の組立て、語句の意味、用法及び表記の仕方などを理解し、語彙を豊かにすること。

3 内容の取扱い

- (3) 内容のBに関する指導については、次の事項に配慮するものとする。
- ア 書くことを主とする指導には30単位時間程度を配当するものとし、計画的に指導を行うこと。
- イ 指導に当たっては、例えば次のような言語活動を通して行うようにすること。
 - (ア) 題材を選んで考えをまとめ、書く順序を工夫して説明や意見などを書くこと。
 - (イ) 相手や目的に応じて適切な語句を用い、手紙や通知などを書くこと。
 - (ウ) 本を読んでその紹介を書いたり、課題について収集した情報を整理して記録や報告などを書いたりすること。

高等学校 学習指導要領

http://www.mext.go.jp/b_menu/shuppan/sonota/990301d/990301b.htm（平成23年11月11日）

学習指導要領全体を見ると、学校における国語教育では、読解や漢字・語彙の指導等、さまざまな技能を伸ばすことが課せられており、作文指導に多くの時間を割くことは難しい。また、作文指導の際、学習指導要領を遵守しても、「作文」をする際の留意点がすべて具体的に書かれているわけではなく、教員によって、目標とするところが異なってしまうことは明らかである。これでは、高校における生徒の作文力の一律の向上は、見出すことが難しいかもしれない。また、多くの大学生が、作文に関してさまざまな問題を抱えていることを、いろいろなところで耳にする。しかし、生徒自身もどのようなことが問題なのかが具体的にはわからないまま大学生となり、そして、大学入学後も手探りのまま、授業におけるレポートや就職活動のための小論文を作成しているとも聞く。一概にはいえないまでも高校までの作文指導のあり方が影響を及ぼしている可能性があることは否定できないだろう。また、多くの書物、ブログ等では、作文指導をはじめとする、現代の国語教育の不足点を挙げているものも多くみられる。さらに、作文能力向上のための参考書や問題集は、抽象的な書き方が多く、また、短文レベルでは向上がみとめられるが、文章全体のレベルが向上するか否かには疑問を持たざるをえないものが多いように感じる。しかし、本稿では、それらについて触れるつもりはない。学習指導要領や高校までの指導教師に責任があるとも考えていない。そしてもちろん、学校や教師の方針によっては、作文指導に多くの時間を割いたが、児童生徒であった学生がそれをくみ取る力が不足していたとも充分考えられる。ただ、現行のいずれかの部分で問題があるからこそ、大学生になって作文教育が必要となってくるのであろう。また、作文が得意ではない人が多いことから、作文能力向上のための多くの書物が売られるのである。もちろん、それらを頼ることも一案である。だが、書物だけでは超えることのできない問題もあるように思うのだ。それらを考えると、私達は、今までの学

習方法についてではなく、これからの大学教育の在り方について言及することが必要なのだといえる。また、いかにして彼らの作文能力を上げていくかということもあわせて考えていくことに、大きな意義もあるように思われる。

3. 調査内容

3-1. 調査基準

本論文では、実際に大学生および社会人に数本の作文を書いてもらい、それを点数化し、現在の大学生の作文能力をはかることを目的の一つとした。作文の点数化の理由は、さまざまな観点から論証することをふまえ、作文を客観的な資料とするためである。点数化の際、留学生が受検する日本留学試験の基準を参考とした。現在、作文検定や、日本語文章能力検定等、日本語能力を養成し、その力をはかるさまざまな試験が行われている。しかし、そのいずれも、基準はあるものの、漠然としているものや、さまざまな解釈ができるもの等、作文を点数化するための基準としては、本稿に即したものではない。そこで、日本の大学に留学を望む留学生が受検する日本留学試験の記述問題の基準を、ここでは参考にすることとした。基準が具体的に書かれていることがその理由である。ただし、留学生と日本人学生とでは作文における注意すべきポイントが異なるため、日本留学試験の基準に筆者が新たに項目を加えたものをあわせて点数化し、作文能力をはかることとした。点数化するのは筆者ひとりであり、そのため主観が含まれてしまうという点は皆無ではないが、すべての作文を、同一の基準で、できうるかぎり公平に点数化した。

日本留学試験の基準は以下のとおりである。

得点	基 準
50点	(レベルS) 課題にそって、書き手の主張が、説得力のある根拠とともに明確に述べられている。かつ、効果的な構成と洗練された表現が認められる。
45点 40点	(レベルA) 課題にそって、書き手の主張が、妥当な根拠とともに明確に述べられている。 かつ、効果的な構成と適切な表現が認められる。
35点 30点	(レベルB) 課題にほぼそって、書き手の主張が、おおむね妥当な根拠とともに述べられている。 かつ、妥当な構成を持ち、表現に情報伝達上の支障が認められない。
25点 20点	(レベルC) 課題を無視せず、書き手の主張が、根拠とともに述べられている。しかし、その根拠の妥当性、構成、表現などに不適切な点が認められる。
10点	(レベルD) 書き手の主張や構成が認められない。あるいは、主張や構成が認められても、課題との関連性が薄い。また、表現にかなり不適切な点が認められる。
0点	(NA)* 採点がなされるための条件を満たさない。

レベルA, B, Cについては、同一水準内で上位の者と下位の者を区別して得点を表示する。

日本学生支援機構『記述』採点基準」より <http://www.jasso.go.jp/eju/saitenkijun.html>
(平成23年11月25日現在)

本稿では、日本留学試験の、課題、主張性、根拠、構成、表現・文法の5つの基準に、新たに文体を加え、6つの項目から作文を点数化することとした。各10点満点で、合計60点満点の作文となる。それぞれの項目は、日本留学試験の基準にならい、以下のように設定した。

- 1) 課題：テーマに沿って書かれているか。大きく反れていないか。
- 2) 主張性：筆者の主張が明らかかどうか。ぶれていたり、論点がずれていたりするようなことはないか。

- 3) 根拠：筆者の客観的な根拠が複数書かれているか。また、説得力があり、その根拠は強引ではないか。
- 4) 構成：段落がしっかりとれているか。また、反論・反駁等、作文あるいは小論文としての体裁が整っているか。文の流れや展開に、不自然さや強引さはないか。
- 5) 表現・文法：文法や表現に誤りはないか。語彙の用い方も間違いがないか。
- 6) 文体：作文あるいは小論文として適切な文体で書かれているか。

ある物事に対して意見を述べる際には、そのように考えた根拠が必要である。また、その根拠が客観的であり、説得力を増すものとなっているかどうか大きなポイントである。3) では、それらを判断する項目とした。また、日本人学生とはいえ、彼らに日本語表記や日本語文法に誤りがないとは限らない。また、表現や語彙も、必ずしもふさわしい用い方をしているわけではない。そこで、表現全般については、5) の表現・文法において点数化することとした。6) は留学試験の基準にはない項目である。大学生の作文あるいは小論文作成の際の問題点のひとつであると筆者が考えているものでもあり、追加項目とした。

3-2. テーマと作文の条件

今回、被験者には、4本の作文をしてもらい、それを点数化したうえで本稿に臨むこととした。字数に幅があること、また、さほど分量がない作文としたのは、被験者すべてが作文が得意だと感じているわけではないことから、被験者の精神的負担を軽くしたいと考えたためである。以下の4つの課題とアンケートをひとつずつ順番に依頼した²⁾。テーマは以下の4本である。

- ①「タバコ」について、あなたの考えるところを600字～1000字で書いてください。辞書を使ってもかまいません。
- ②日本国内における全面禁煙について、あなたの考えるところを600字～1000字で書いてください。辞書を使ってもかまいません。
- ③タバコは体に悪いから全面禁煙にすべきだ、という意見と、個人の嗜好だから強制できるものではないという意見とがあります。あなたはどちらの意見に賛成ですか。あなたの立場を明らかにして、600字～1200字で書いてください。辞書を使ってもかまいません。
- ④「タバコ」について、あなたの考えるところを600字～1200字で書いてください。今までに書いたものをふまえて結構です。また、辞書を使ってもかまいません。

①と④とは同テーマである。以下を被験者への注意事項とした。

- テーマについて、自分の考えを深めるために、本を読んだりインターネットなどで調べたりしてもかまわない。
- 被験者自身のことば・表現を用いることを守る。
- たとえば、テーマ②と③とで内容や主張が異なる等、テーマによって、被験者自身の主義主張を変えてもいい。反対に、前に書いた作文の内容を参考にしてもかまわない。つまり、前に書いたものとの関連性については不問に付す。

被験者が一か所に集合して時間を決めて一斉に書くのではなく、個々人の時間に作文をし、メール添付あるいは手書きで提出する方法とした。事前にテーマに関する内容を調べることも認めたため、被験者によって、時間の費やし方も異なる。これは、制限時間のある試験で書いた作文をみるのが目的ではないこと、また、すでに持っている知識をはかるための調査ではないことが理由である。さらに、時間制限を設けたために、被験者の意にそぐわない作文ができあがることを避けるねらいもある。ただし、各自で調べる際、参考資料の表現、考えにはひきずられることなく、被験者自身のことば・表現を用いることはもちろん、それぞれの作文の内容も、各自の考えのもとでまとめたものを述べることを絶対条件とした。

アンケートは、テーマごとに、

- 今回のテーマは作文しやすかったか

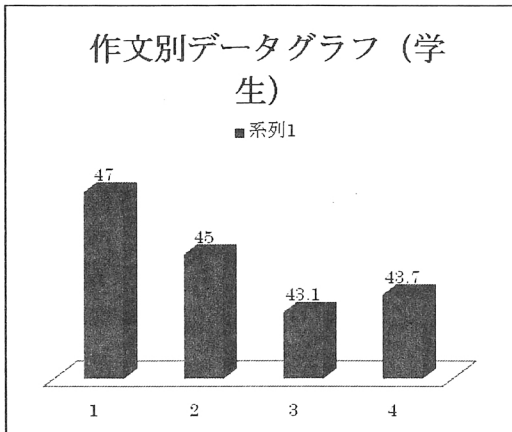
- 前に書いた作文は、今回の作文をする際の参考になったか

等を、選択肢と自由回答併用とで行った。結果、大学生は1年生から4年生までの20名、社会人は28歳から41歳まで（平成23年11月30日現在）の10名の作文をサンプリングが可能となった。

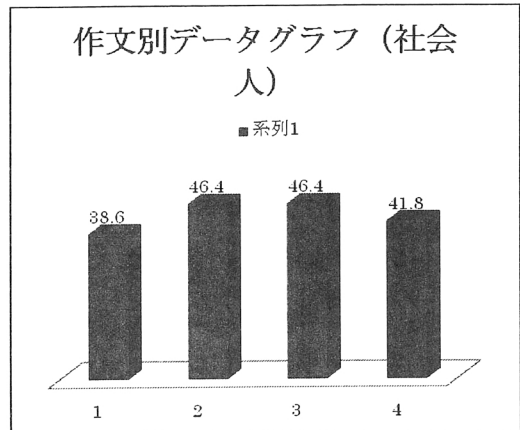
4. 調査結果

以下は、作文別のデータおよび基準別のデータである。

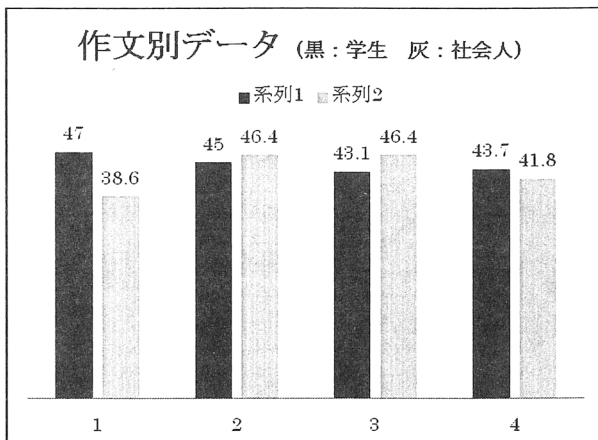
I.



II.



III.



グラフⅠ.、Ⅱ.、Ⅲ. とも

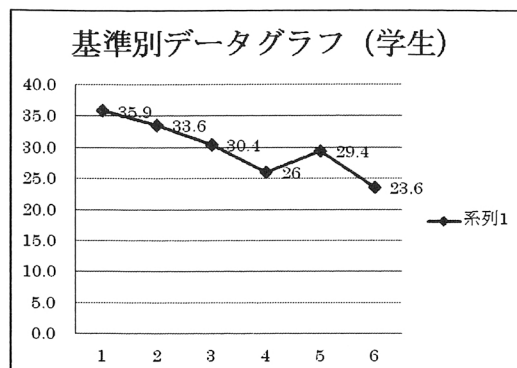
1. 「タバコ」について（本論文では①と記載）
2. 日本国内における全面禁煙について（本論文では②と記載）
3. タバコの全面禁煙への賛否（本論文では③と記載）
4. 「タバコ」について【再】（本論文では④と記載）

また、ポイントの最高は60である。

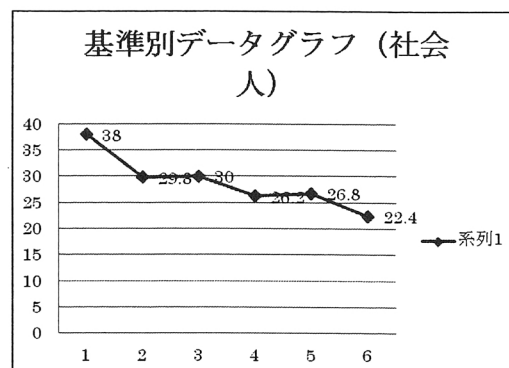
今回の大学生への調査で明らかになった（グラフⅠ. を参照のこと）のは、③のタバコの全面禁煙への賛否のような、二者択一のテーマでのポイントが低いということである。また反対に、社会人にとっては、自由度の高いテーマほどポイントが取れず、大学生とは相反する結果となった（グラフⅡ. を参照のこと）。さらに、①と④とが同じテーマであり、①、②、③の作文をふまえていいという条件であったにもかかわらず、大学生のポイントは3,3ポイント下がっている。一方で、社会人の結果は3,2ポイント上がっていた。ただし、大学生は④のポイントが下がったにもかかわらず、比較をすると、社会人よりも総合的なポイントは高いことを見ると、やはり大学生は①、④のようなパターンの自由度の高いテーマが書きやすいと判断できる（グラフⅢ. を参照のこと）。

次に、以下に、基準別のデータを載せる。

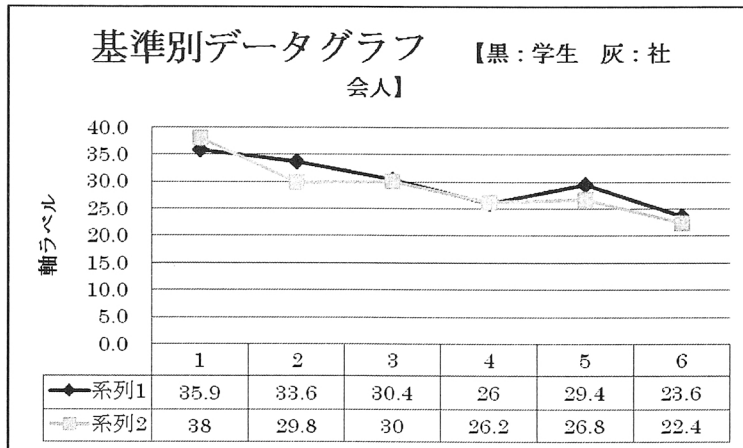
IV.



V.



VI.



グラフⅣ.、Ⅴ.、Ⅵ. とも、

1. 課題
2. 主張性
3. 根拠
4. 構成
5. 表現・文法
6. 文体

また、ポイントの最高は40である。

大学生、社会人共通の特徴は、概ね右肩下がりのグラフとなっている点である。つまり、構成や文体のポイントが低いことが挙げられる。そして、6. 文体が、大学生、社会人ともに半分強のポイントしか得られていないことが認められる。内容部分と関連性をもつ、2. 主張性や3. 根拠はそれぞれ75%～85%のポイントであるのに対し、展開に関わる4. 構成や、作文の種類を決定づける6. 文体は、60%前後のポイントしかない。これが、作文あるいは小論文作成能力の、大学生および社会人のひとつの実態であるといえる。

5. 考 察

自由度の高いテーマ①とテーマ④の評価は大学生のほうが高く、反対に、内容にある程度の制限があるテーマ②およびテーマ③は、社会人の方が評価が高い結果となった。大学生の多くの感想に、

- 自由に書けるテーマの方が自分の言いたいことが書けていい。

とあったことからみても、自分で設定したテーマの中で書くことの方に書きやすさを感じていることがわかる。また、特にテーマ③に関しては、

- 二者択一の課題は、自分の意見がどちらとも決められずに困った。

との感想があった。このことから、自由度の高い課題の方が、大学生には自分の意見が述べやすかったといえる。もちろん個人差はあり、大学生でも二者択一の課題を最も書きやすいとした学生もいたが、コメントの多くが、テーマ①あるいはテーマ②を書きやすかったとしたものであった。

一方で、社会人は、課題に、ある程度の制約があるほうを書きやすいと認識していたことが、作文後のアンケートからもうかがえる。テーマ①に関して、

- 課題の内容が広いため、何を書き、またそのために何を調べればいいのか戸惑う部分があった。

というコメントがあったことから、テーマ①やテーマ④のような課題は書きにくい印象だったようだ。

では、これらの結果から、いえることは何か。まず一点目に、大学生の作文において、テーマ③の数値が最も低いことに注目したい。二者択一の課題に対し、「どちらともいえない」とする学生が多かったが、それは、「課題にそって、書き手の主張が、説得力のある根拠とともに明確に述べられている。(前出・日本学生支援機構『記述』採点基準より)」という基準にはあてはまらない。二者択一の課題では、自分の立場、考えを明らかにすることが必要なのだ。もちろん、意見はさまざまあるものであり、どちらか一方だけの見方をする必要はない。むしろ、賛成、反対といった、片側からだけの意見ではなく、両面また多くの側面から物事を考え

ていくことで、より深い考察が可能になっていくのである。そのために必要なのが、反論や反駁である。これらを述べることで、書き手自身の考えも深まり、読み手にも書き手の考えをしっかりと伝えることが可能になるのだ。つまり、構成の仕方を知ることが、文作成と大きく関係しているといっている。構成が確実なものであれば、論理性も高くなり、説得力が増す作文あるいは小論文となる。このように考えると、内容と構成とは無関係ではなく、同様に指導すべき、また知るべき技術であることが改めてわかる。

二点目は、テーマ①とテーマ④について、大学生と社会人とのポイントが昇降逆になっていることに注目したい。大学生は3,3ポイント下がり、社会人は3,2ポイント上がっている。これは、数値には表れないのだが、大学生は、次に挙げる、「文体」が影響しているものと推測できる。テーマ①、②、③のそれぞれの内容をふまえて書こうとした結果、述べたいことがまとめられなくなってしまったという学生が多くみられたのだ。主張性や根拠等の内容点だけが原因なのではなく、文体の影響が、ポイントを下げた要因の一つであると筆者は考えている。一方、社会人は、テーマ①、②、③で書いたことをもう一度まとめる文章になったと感じている人が多く、それが文体のマイナス点につながることはあまりなかったようだ。大学生も、文体に関する指導の後にもう一度同テーマで書けば、おそらくポイントが上がるだろうと考えている。

三点目だが、もっとも大切な結果のひとつとして、大学生、社会人ともにポイントの低かった、文体についても考える必要があるだろう。主に留学生が使用する作文の参考書には、文体に気をつけるように、と、練習項目があるテキストがほとんどである。その中では、話しことばで使用する語と、書きことばで使用する語との比較があり、それぞれ使い分けをするように説明があるものが多い。もちろん、日本人が使用する参考書にも、量の差はあるが、その説明はなされている。だがそれは、あくまで、話しことばと書きことばとの相違である。しかし、作文あるいは小論文にふさわしい文体は、それだけではないのだ。この基準のポイントが低かった被験者は、今までに、あるいはこの調査を通して、「(作文あるいは小論文を)書くこと

とに慣れた」と感じている傾向にあったようだ。反対に、どのように書けばいいのかがわからないという被験者の文体にも、同様の傾向がみられ、ポイントが低くついていた。ここで共通していたのは、文体が独白調になっている点であった。筆者はこれを「ブログ調」と名付けている。このブログ調は、単語レベルから文章全体にまでさまざまな箇所で見受けることができる。ブログ調で書かれたものとは、例えば、「タバコを道端に捨てる輩がいる。いやはや、本当に困ったものだ。こんなとき、私は目を覆いたくなるのが実情である。」(筆者作)のような文をさす。書き手の主観性は充分であり、伝えたいことも理解できるが、意見文としての作文あるいは小論文としてはふさわしくない。これは、小説や随筆、ブログ、日記等、作品として、あるいは独白的なものとしての記述であれば全く問題はない。しかし、今回のような意見文としての作文あるいは小論文は、それらとは性質が異なるのだ。このブログ調は、書き手自身の意見や考え、主観を入れることに慣れてくると多くみられる現象と言っている。しかし、ブログ調にするだけで、作文あるいは小論文の程度を下げてしまうことにもなりかねず、また、読み手にある種の不快感を与えてしまう場合もある。このように考えると、意見文としての作文あるいは小論文を作成する際には、ブログ調の使用は、極力避けた方がいいと言わざるを得ない。そこで、書きあげた際、また可能ならば、書いている途中で読み返し、意見文にふさわしくない文体になってはいないか、書き手自身がチェックする目と力を持つことを指導することが大切なのである。ただし、作文を「書きなれる」ことに問題があるわけではない。むしろ、作文をすることそのものに抵抗感を持たなくなる、あるいは抵抗感が薄れることは非常に意義のあることである。「書きなれてきた」と書き手が感じ、ブログ調で書く傾向がみられたときに初めて、ブログ調の使用を制限するという新たな基準を提示することが、作文をする人にさほど負担に感じさせず指導することにつながり、多くの人が持っている、作文に対する苦手意識を克服するひとつの手段となるのではないだろうか。

また、このブログ調は、書きなれていない人や、多くの考え、根拠等を書きたいと考えている人にも見られる現象である。これらは、「書きなれた」と感じている

人とは異なるアプローチが必要となる。書きなれていない人には、作文の形式を提示し、使用すべき表現を教え、同時に早い段階から書き手がブログ調であることを本人に理解させることで解決する場合が多い。また、意見や根拠を多く述べようと書いた結果、ブログ調になってしまった人には、まず、述べたいことをメモや図にしてまとめることを提案するといい。まとめる力がつくだけで、このブログ調が見られなくなる場合があるからである。今回の作文の中にも、

- 言いたいことがありすぎてまとめきれなかった。もっと字数がほしかった。

とアンケートに記し、ブログ調になっている部分が多くみとめられる作文を出した被験者がみられた。二点目に注目すべき点として挙げた、テーマ①と④の大学生の結果は、ここに関連しているのである。述べようとしたことをまとめきれずに、しかしそのすべてを作文あるいは小論文に入れようとしたために、主観性が強くあらわれ、その結果、文体がブログ調になってしまったのである。また、書き手が、自分の文体についてブログ調か否かを認識しているかどうかは、その後の指導の方法に大きく関わる部分であると筆者は考えている。そこで、作文を担当する者は、書き手が自身の文体をどのように認識しているのかを確認しながら指導を進めていく必要がある。

今回、大学生と社会人とでの相違もはかるべく、社会人へも調査の協力を依頼した。被験者数は多くはなかったものの、社会人の特徴が表れたように感じている。それは、テーマ②やテーマ③が、テーマ①やテーマ④に比べてポイントが高かったことである。テーマ①やテーマ④は、大学生は、「自分の書きたいこと」が比較的迷わず決まり、そのため主張も一貫したものとなっていた。一方で、社会人は、課題に対する自分の意見と主張とがずれている点がしばしば見受けられた。反対に、自由度の低いテーマ②やテーマ③の形式では、社会人は全般に、その主張に一貫性があった。今回は、それらについては調査対象ではないため、筆者の憶測でしかないのだが、社会に出て、ある一定の枠組みの中で社会生活を送ることで、自由回答ではなく、制限された内容の中で自身の考えを述べ主張することに、次第に慣れていった結果のひとつの表れとみることはできないだろうか。社会に出ると、自由回答

だけではなく、限られた情報と限られた選択肢から自身の回答を提示しなければならないことも決して少なくはないだろう。そこから培われた技術であると推測はできないだろうか。だが、自由度の高低差に限らず、常に、与えられた課題に沿って回答をし、そこに自分の意見や考えを提示することが最も大切ではある。ただ、自由度の低い課題に対して意見が出せるのであれば、それをテーマ①のような自由度の高い課題に応用することも可能であろう。それができれば、どのようなテーマの課題であっても、内容面でほぼ平均したレベル、つまり、主張をもった作文を書くことができるようになるのではないだろうか。多くの大学生が不得意だと感じた、テーマ③のような二者択一課題の作文に際しての考え方が定着すれば、それを他の多くの作文や小論文にも生かせると筆者は考えている。テーマ①のような課題の場合、「タバコ」の何について考えたいのか、また、その考えに対する反論や反駁はどのようなものが想定できるか、を考えていくことで、全体の構成をはかることが可能となるのだ。ただし、二者択一課題の場合には、最初からテーマとして「A or B」とあるため、書き手はAまたはBを中心として考えを進めていけばいいのだが、自由度が高くなると、AやBにあたる内容も、書き手自身が決めなければならない。しかし、テーマとしての軸になる部分を決めれば、主張がずれない限り、どこに焦点をあてて作文をしたのか、を明示することができ、最終的には二者択一とほぼ同様の進め方で作文をすることが可能になるのだ。もちろん、字数をさらに増やし、また多くの時間をつかって書くことができるのであれば異なる考え方、書き方も可能だが、多くの場合、この二者択一課題の書き方は、応用としてさまざまな場合につかえると筆者は考えている。

6. 大学の授業での指導点

今後、大学の授業科目として、日本語表現に関わるクラスが増えることは確実である。では、特に、作文や小論文を書くことを目的としたクラスに携わる場合、どのような点を考慮すべきなのだろうか。

大学の授業では、半期科目の場合、現行のとおりであると仮定すると、指導そのものに充てられるのは、90分授業を12～13回といったところだろう。時間の制約を考えると、かなりシステマティックに行われなければならない。そこで、テーマは二者択一課題に絞り、その中で、さまざまな作文技術を学んでいくことが一つの方法として挙げられると考えている。その際、最初から提示すべき項目としては、

ア．作文や小論文の形式を覚えること。

イ．「どちらにも賛成」ではなく、自分の立場・考えを明らかにすること。

ウ．自分の考えを裏付ける根拠・理由を複数挙げ、それらを明確にすること。

エ．反駁の根拠も複数用意し、それらを提示すること。

が挙げられよう。ア．の作文や小論文の形式は、ただ学生に、「三段論法、序論・本論・結論」や「起承転結」を意識するように、と伝えても、理解が難しい。そこで、例文を提示し、その意見文の形式のどの点に注目すべきかを丁寧に指導すべきなのである。さらに、イ．は、その次のウ．につながる基準となる。自分の立場・考えを明らかにし、中立を認めないとする考え方を理解させることが大切である。それと同時に、意見文ではその根拠を明確にする必要があることも指導しなければならない。「好きだから好き。」のようなものは、意見文では認められないのである。そして、ウ．にもあるように、その根拠は複数挙げることも大切である。また、エ．にある反駁の方法は、ア．の「形式」に関連するものであるが、意見文のどの部分に、どのような表記をすることで反駁となるのか、具体的に示すことが必要であろう。筆者は実際にクラスでそれらをふまえた指導をしているが、数回の授業で、多くの学生がこれらのア．～エ．が実践可能となっている。もちろん、これだけでは不足なのだが、まずはここまでを最低限のものとして指導すべきであると考えている。

また、文体に対しても注意が必要である。意見文は敬体ではなく常体で書くことを最初に指導しなければならない。さらに、ブログ調にならないように、指導する

必要があるのだが、ただし、このブログ調については、少し先に進んでからの指導で充分なのではないかと考えている。もちろん最初から必要な学生も存在するであろうが、まずは、型にはめた書き方ではなく、学生自身のスタイルで書くことで、自身の文体を客観視する機会をもつべきだと考えるからである。そこから、少しずつ文体について指導すると効果的なのではないかと思う。

時間に余裕ができたり、学生のレベルや進度をはかって先に進むことができたりするようであれば、二者択一課題ではなく、自由度の少し高い課題の書き方も指導していくと、書き方、考え方ともにさらに広がりをもたせることも可能となろう。

また、作文の仕方そのものだけではなく、もう少し広く指導していくことで、結果として作文能力が向上すると考えられる点もある。今回の調査においては、「タバコ」をテーマにしたのは、具体的なテーマであったこと、かつ多くの人にとって関心が高く、それぞれが意見をまとめやすいテーマだと推測できたことがその理由である。しかし、すべての意見文の課題が、このような具体的で、多くの人が意見を出しやすいものであるとは限らない。そこで、抽象度の高いテーマをいかに書くことができるか、という点も考えていく必要がある。それは、資料の見方、書き手の考え方等、作文をする能力以外の部分にも関係してくるところであり、それらの方法も指導していくことが教師には課せられるであろう。昨今、図書館の使い方がわからないという大学生も多くいる。その現実をふまえ、学校などで行われる図書館ツアー等と並行しながら資料の見つけ方や「考える方法」について指導していくことも、作文能力を向上させる一つの方法といえるであろう。

7. 今後の課題

今回は、こちらの主旨を理解の上協力してくれた、大学生20名、社会人10名の作文をサンプリングすることができた。大学生は、筆者の作文指導を受けたことの無い学生を対象としなければならず、また、社会人についても、多くのサンプルをとることはできなかったのだが、それでも、今回の考察に足る結果が得られたと考え

ている。本調査は、長期にわたるうえ、被験者には毎回作文をするための時間を割くことを要求しなければならないため、さまざまな面での負担も強いることになってしまう。だが、今後も、本調査および論文の目的・意義を果たすべく、サンプル数を増やし、今回の結果が妥当なものであったのかどうかを再検討する必要がある。また、テーマの自由度の高いものから徐々に低いものにし、もう一度自由度の高いものを書くことにしたが、この方法を、テーマを変えて何度か繰り返し、今回の結果と同様のものが得られることを確認したい。さらに、指導後の作文の結果も調査していきたい。だが、これは調査者の主観も多く入る部分となることから、方法を考慮する必要がある。

今回は、小学校時代から現在までに、学校の授業ではなく、個人的に作文指導を受けたことのある被験者もいた。ただし、もともとの分母が小さいうえに、指導を受けた被験者の数も少なかったことから、今回は特化しなかった。次回、同様の調査の際には全体数も増やし、作文指導を受けたことのある被験者を対象とした結果もみとめられるようにしたいと考えている。

8. ま と め

子どものころから、作文をするということに抵抗感をもっている人は少なくない。その作文が何かの目的で書くことを課されたものであり、それに点数をつけられ、評価対象とされることを考えると、たしかに嫌悪の感情はやむを得ないのかもしれない。だが、形式と文体を知り、作文をするための考える順序を学ぶことで、多くの人が意見文としてまとまりのある文章を作成することは可能なのである。学生の時期にそれを教わらなくとも、社会人になってからのいずれかの時期に一度その考え方をすることで、多少なりとも意見文と他の文章とのさまざまな相違を知り、どの文章でもある程度自信を持って書けるようになることは、多くの人の望みなのではないだろうか。その作文能力向上に向けて、今、日本の大学が、徐々に授業の科目の中の一つとして開講してきているのである。大学を卒業するまでに、1人でも

作文嫌いの人を減らし、社会人としても作文レベルでは困らないような学生を育てていくことは、大学教員としての役目の一つであろう。今回の被験者すべてが、「今までに作文指導を受けたいと考えたことがある」と回答していた³⁾。作文向上の機会を待っている人は少なくないのである。

*今回被験者となり作文を提供してくれたすべての方に感謝します。

【参考文献】

- ・木下 是雄 (1981)『理科系の作文技術』中央公論社
- ・本多 勝一 (1982)『日本語の作文技術』朝日新聞出版
- ・アカデミック・ジャパニーズ研究会 (2002)『大学・大学院留学生の日本語③ 論文読解編』アルク
- ・アカデミック・ジャパニーズ研究会 (2002)『大学・大学院留学生の日本語③ 論文作成編』アルク
- ・日本語文章能力検定協会 (2002)『日本語文章能力検定 2級 徹底解明』オーク
- ・石黒 圭 (2005)『よくわかる 文章表現の技術Ⅱ ― 文章構成編 ―』明治書院
- ・松岡 龍美 (2010)『＜日本留学試験対策＞記述問題テーマ100 [完成編]～記述問題から小論文・志望理由まで～』凡人社
- ・中山 秀樹 (2010)『ほんとうは大学生のために書いた日本語表現練習帳』株式会社すばる舎リンテージ
- ・高等学校 学習指導要領
http://www.mext.go.jp/b_menu/shuppan/sonota/990301d/990301b.htm (平成23年11月11日現在)
- ・日本学生支援機構「『記述』採点基準」より <http://www.jasso.go.jp/eju/saitenkijun.html> (平成23年11月25日現在)

注

- 1) 本稿では、「作文」には、小論文も含まれる。長さや書かれた内容によって、小論文になりうるからである。ただし、作文は「文を作成する」という意味としても使われるため、本稿においては、小論文を含んだ作文のことを、「作文あるいは小論文」と表記することとする。
- 2) テーマ①を提出後にテーマ②を提示、テーマ②の提出後にテーマ③を提示する、というように、提出後に次の課題を依頼した。
- 3) 過去に作文指導を受けたことのある被験者は除く。